

文殊楼（重文）

文殊菩薩に捧げられた建物である。根本中堂を正面に見下ろす尾根の上、長い階段を上った場所に位置する。中国天台宗の宗祖、智顗の著作『摩訶止観』には、『法華経』の教えを実践する修行方法として四種三昧が記されているが、ここはその一つ、「常坐三昧」を行う道場である。90日間不休で結跏趺坐し坐禅修行を行う。

最澄はこの建立を意図しながらも生前には実現されず、最澄の弟子円仁（えんにん 794－864）によって創建される。円仁は文殊菩薩信仰の中心地である中国・五台山の文殊菩薩堂を訪れたことがあった。貞観三年（861）建立に着手。壇の五方には五台山から将来した霊石が埋められた。円仁没後の貞観八年（868）には、円仁の弟子たちが五台山の香木を胎内に収めた文殊菩薩像を造り安置した。

さらに昭和59年（1984）には当時の天台座主山田恵諦が中国五台山を参拝し、先人の故事にならって五台山の霊土を持ち帰り、文殊菩薩像の獅子に踏ましめた。

文殊菩薩は智慧を完全に具えて説法を行うとされ、今では受験合格、学業成就などの願い事がある人のお詣りも多い。

文殊楼は天津市の指定文化財になっている。